URP
Osaka City University

URP GCOE Report Series

No.5 Feb. 2010

青空大学
——パペットをつくろう！
論考集

青空大学連絡会

大阪市立大学 都市研究プラザ
Urban Research Plaza, Osaka City University

「青空大学――パペットをつくろう！」論考集

ドキュメント青空大学

原口 剛　2

グローバルな運動空間によせる想い

高祖 岩三郎　10

洞爺湖Ｇ８サミットをめぐるグローバル運動の「俯瞰」

――受苦受益、被害加害の観点から

濱西 栄司　18

出来事と協働

――「青空大学」に参加して

中倉 智徳　26

もうひとつの、メディアになる

――青空大学とビフォ「メディアのオルタナティヴ」をつなぐもの

吉澤 弥生　30

歩きながら考える、新自由主義とアート。釜ヶ崎のちいさな場から

上田 假奈代　38

そこにあるモノを見つめて頭と体を動かす

――グローバル金融権力を無力化するための農業生態学的発想

綱島 洋之　46

執筆者一覧　54

ラディカルパペット零年

小田マサノリ／イルコモンズ

ドキュメント青空大学

原口 剛

因果の法則は、歴史をとうぜん前進するものであると仮定しているが、あいにく歴史は軍隊の行進ではない。歴史は急ぎ足で横這いするカニ、あるいは石を穿つ、やわらかな水の滴り、数世紀かけて蓄積した地殻の歪みを解き放つ地震なのだ。たったひとりのひとがある運動に活気を与えることもあれば、ひとりの人の言葉が、数十年も後になって実を結ぶこともある。ときには、少数の熱烈な人びとが世界を変え、大衆運動を先導し、数百万の人びとの行動を招きよせる。ときには、その数百万の人びとの憤りや理念を共有し奮起することで、あたかも天気が変わるように、世界が変わることもある。すべてに共通していることは、想像することや、希望を育むことで、変化ははじまるということ。

――――レベッカ・ソルニット

ソルニットは「社会における基本的な闘いは、いま世界で進行していることについて、いかに異なる物語を語るかということをめぐるものだ」という。世界における正と負を対峙させるパペットのデモは、多くの演劇のベースにある善と悪の対決という根本に立ち返り、それをラディカルに上演する路上劇であるとえる。また、大統領やG8首脳などをパペットにした場合には、実はそうした権力者たちがあやつり人形やはりぼてにしかすぎないという辛辣なメッセージを運ぶメディアともなる。

――――イルコモンズ

１．知をキャンパスから解放する――「青空大学」という名称の意味

本稿は、G8対抗国際フォーラムの一環として、2008年6月22日に開催された企画、「青空大学――パペットをつくろう！」の記録である。企画の主催には、さまざまな立場の人びとがかかわっており、この企画の意義や思いは人によってさまざまだろう。私は、数年のあいだ寄せ場・釜ヶ崎や野宿生活者の運動にかかわりながら、地理学者として研究活動に携わってきた。ここでは、そのような立ち位置から、一連の企画の記録と振り返りを試みたい。

まずは個人的な履歴とともに、抱いてきた問題意識を述べておく。私は2000年に大阪に移住し、以降、釜ヶ崎の戦後史を明らかにすることを中心的な研究の課題としてきた。私にとって釜ヶ崎は、「研究対象」であるというより、そこでさまざまな人から学び、研究者としての自分が育てられる場であり、まさに「大学」そのものであったといっていい。なかでも鮮明に記憶に残っているのは、全港湾建設支部西成分会が主催する「日雇労働者学

習会」で自分の研究を報告したことである。学習会では、長年釜ヶ崎で労働し、生活をしてきた労働者が、私の拙い報告に真摯に耳を傾けてくれた。質疑応答では、「これからの釜ヶ崎はどうなっていくと思いますか？」といった質問をいくつも投げかけられ、未熟な私は核心をついた問いに戸惑いながら、必死に自身の考えを口にした。こうした場のなかで、考え、悩み、耳を傾け、語った幾多もの経験が、研究者としての私をかたちづくっている。

2007 年から、私は非常勤講師として、学生を前に大学の教鞭をとるようになった。するとすぐさま、制度的な大学に対する違和を感じはじめた。目の前にいる学生たちは、授業料を支払って私の講義を受講している。私は、講義を行うことで、わずかばかりの賃金を手にし、生活をしている。賃金を手に入れなければ家賃を支払えないという現実は、もちろんある。だが、私のことばが大学という制度のなかで「売り買い」の対象となっていることに対する違和感は、拭いがたかった。私のことばは、高い授業料を払ってしか聞くことのできない、言い換えれば、金銭を支払ってはじめて聞く権利が得られる、そのような代物なのだろうか？誰かに伝えたいと思っている私がいて、それを聞きたい人、知りたい人がいるならば、それだけで「大学」は成立するのではないだろうか？

教壇に立った当初の違和感は、やがてキャンパスという空間への問題意識へと変わっていった。学生が高い授業料を払うのに対し、非常勤である私たちが手にする賃金は、あまりにも安い。それでは、いったい授業料はどこに消えているのか？ キャンパスをすこし観察するならば、それがきらびやかな建物や情報インフラ、はたまたセキュリティや管理のシステムといったものに投じられていることは明らかだ。これらの投資は大学という空間を外部から遮断し、閉じられたものに変えようとしているようにみえる。キャンパス内に設えられた暗証番号つきの扉や、入館を認証システムによって管理する図書館のゲートといった装置が、この趨勢を象徴している。キャンパスは、透明なガラスや白い建物によって塗り替えられていくほどに、外部とのアナーキーな接触を遮断させていく。また、授業料が高騰していく昨今の状況を踏まえるならば、キャンパスへの「入場資格」を手にするチケットは、ますます入手困難なものになっていっているといわなければならない。

もしこのまま知が白く透明なキャンパスに囲い込まれたままならば、私のことばは、私がほんとうに伝えたいと思う人々からは遠ざかってしまうだろう。このような趨勢に対抗するためには、まず、本来の大学とはなにかを問わなければならない。村澤は、いまやキャンパスに囲い込まれた制度的な大学によって見失われようとしている本来の大学のありようを「潜在的な大学」と定義し、次のように述べている。「そのような「大学」は、目的も理念も、さらにその存在さえもつねに目に見えない、非制度的で非物質的な領域にある存在である。薄暗いサークルのボックスのなかで繰り広げられる学生たちの果てしない問答、夜の研究室でおこなわれる自由な研究会。そうした教員や研究者、大学院生、学部生、一般社会の人々が自由に混じり合い、コミュニケーションが可能になる場所こそは、たとえ制度的な形態をもたないとしても、本来の意味で「大学」と呼ぶべきものである」（村澤 2009）。

ここで村澤は、わかりきっていること、当たり前のことを述べている。しかしここで考えなければならない。こうした「当たり前のこと」を敢えて述べなければならないほど、

「本来の意味での大学」は切り縮められ、危機に瀕しているのだ。1960 年代、「大学解体」をスローガンに熱狂的な学生運動が巻き起こったことは周知のとおりである。皮肉なことに現在は、ネオリベラリズムの論理のなかで「大学」は解体されようとしている。だからこそ私たちは本来の大学に立ち戻り、意識的にそれを守り、再構築しなければならない状況にある。

かような状況は、大学に限ったことではない。アートが置かれた現在的状況について、高祖は述べる。「冒頭で触れたように、そこから新たなアートが生産されるような近隣空間がニューヨークから消えつつある反面、その制度＝「白い壁」は、より強力に自己拡張してきた。それはニューヨークを、アートを生産する街からもっぱらそれを展示し売買する街へと移行させてきたようだ。それは世界のどこかの——まだ生産的な「集団身体性(mass corporealiy)」を胚胎した——街でアートが生産され、ニューヨークは単なるビジネス・センターに変わっていくという非可逆的な趨勢なのだろうか？われわれに、この趨勢を逆転させることは可能だろうか？もしそれが可能だとするならばアートの作品製作（practice）を、「白い壁」から解放し、いま一度、都市空間全体を巻き込むようなアクティビズムとの関連でやり直すことによってのみであろう」（高祖 2007）。試みに、ここで述べられる「アート」を「研究」に、「白い壁」を「キャンパス」に置き換えてみれば、アートの置かれている状況と研究のそれとが同じ危機的境遇に置かれていることがわかるだろう。アートは、白い壁に対抗すべく、アクティビズムとの関連で都市へと開いていこうとしている。研究もまた、白く透明なキャンパスに対抗するために、アクティビズムそして都市へと開いていかなければならないだろう。

２．ローカルなものとグローバルなものの邂逅——ソルニット来阪

上に述べた問題意識のもと、私はとにもかくにも何らかの行動をはじめたかった。失敗してもいい、まずは非常勤先でやっている講義を、そっくりそのまま大阪城公園で開催してみよう。いまにして思えばあまりに無謀な試みを企んでいたものである。このような妄想に没頭するなかで、頭のなかでは「青空大学」というネーミングが浮かんでいた。「青空」という表現には、「青空市場」といった用語がそうであるように、屋外で営まれるという意味合いのほかに、公共空間で開かれるなにものか、というニュアンスがある。知の公共化を目指したいと思惑を練っていた私には、ぴったりの表現だった。

そんな折、櫻田和也から、来るべき G8 に向けて対抗国際フォーラムを開催するのだが、デヴィッド・グレーバーとデヴィッド・ソルニットを大阪市立大学都市研究プラザで招聘できないだろうか、という打診を受けたのだ。さっそくプラザの中川真先生、水内俊雄先生にお願いし、招聘の目途をつけ、企画実現へと動きはじめた。ソルニットは、パペット・アーティストとして世界的に著名な人物であり、パペットづくりのワークショップは企画に欠かせない。これは公共空間で「青空大学」を開催したいと常々思っていた私にとって、またとない絶好の機会だ。ワークショップをぜひ、テント村が数多く点在する大阪城公園

で開催したいと考えた。公園をキャンパスに見立て、パペットづくりという「工作」の授業を行う。密かに企んでいた青空大学だったが、G8 対抗という文脈に乗せ、晴れて実現することができるというわけだ。

当初から私には、ちょっとした確信があった。ソルニットのパペットづくりは、段ボールや発泡スチロールなど､辺りに転がっている身近なモノを素材として製作するものだが、ワークショップ参加者として想定される野宿生活者は、段ボール集めを生業としている人が多く、ホームであるテントを自前でつくっている。身近な素材を再生させるということに関しては、彼らはプロフェッショナルであり、彼らがつくりだすテントはいわば原生的なアートである。もうひとつ、長居公園テント村での経験も念頭にあった。長居公園テント村は、2007 年に強制撤去されてしまったのだが、これに対抗すべく、テント村の住民は芝居によって強制撤去の不当性を訴えかけた。それはまさに、パペットの真髄である演劇的抵抗を具現するものであった。さらに、長居公園テント村は毎年 5 月に「大輪まつり」という地域密着型のまつりを手作りで開催している。そこでは、段ボールアートなどの創意工夫に満ちたワークショップや展示が催されていたのだ。

このようなローカルな文脈を踏まえるならば、パペット・ワークショップがごく自然なかたちで実現しうるであろうことは確信しえたのだ。事実、その狙いは的中する。2008 年 6 月 22 日のワークショップには各公園から野宿生活者や支援者が多数集まった。参加者はみな製作に熱中し、色とりどりの多彩なパペットを見事に仕上げてみせた。さらに、この場には生活や労働に不安を抱え、あるいは精神的な病に苦しむ若者もつどった。このとき私たちは、穏やかな時間と空間をつくりだし、共有することができた。

ソルニットが私たちに伝えたのは、ありふれたものを素材にして、思い思いのパペットの製作する手法であり、それらを駆使した演劇的な抵抗の在り方である。だがそれは、対抗文化の単なる「輸入」では決してなかったのだ。上述したように、かような抵抗の在り方は、すでにローカルな文化として大阪の地に根付いているものだった。したがってそこで実現したのは、**グローバルな対抗文化が、ローカルな実践と邂逅する場面**だったのだ。私たちは、試行錯誤のなかで積み重ねられてきたローカルな対抗文化が、地球規模で巻き起こっている対抗運動の一翼を担っていることを、たしかな手ごたえをもって確認することができた。

ワークショップ終了後には、それぞれのパペットを掲げ公園内のパレードを行う予定だった。このときの経験もまた、奇跡的なものであった。「青空大学」と銘打ったものの、当日はあいにくの土砂降りの雨に見舞われてしまい、パレードの実施は中止せざるを得ないものと思われた。かたや、太鼓やトランペットを手にした楽隊は、晴れ間を祈願して公園内に音を鳴り響かせていた。その想いが通じたのであろう、パレード直前になって、それまでの豪雨はぴたりと止んだのだ。

こうしてパレードの幕はあけた。私たちは、ひとりひとりのメッセージを書き記したパペットを高々と掲げ、水たまりだらけの公園内を自由奔放に練り歩いた。その瞬間、公園内は束の間の祝祭空間と化した。参加者の多くは、主流社会の片隅に追いやられたマイノリティである。公園内に起居する野宿生活者であれば、冷たい視線を浴び、肩身の狭い日

常を強いられている。そんな参加者たちが、この祝祭の時間と空間のなかでは自分たちの思いや声を掲げ、公共空間の主人公となった。自分たちはたしかにここで生きている、その存在をにぎやかに表明することができたのだ。

3．パペットはモノ申す――ソルニットの実践

ソルニットのパペット作製の手腕は、見事というほかしかなかった。寡黙な彼は黙々と段ボールを組み立て挙げ、不可思議で不気味でもあるような、豊かな表情をもった、青い顔の巨大なパペットをあっという間につくりあげた（これを私たちは「ブルーパペット」と呼んでいる）。それは、「アート作品」としての価値を充分に有しているように思われた。

しかし、彼はそれを「作品」として位置づけられることを頑なに拒否した。ひととおりパペット製作を終えた後、私たちはそれぞれのパペットのプレゼンテーションの時間を設けていた。ひとりひとり、自分がつくったパペットを解説し、そこに込めた思いを述べる、そんな時間だ。このときソルニットは、自分のパペットについて語ることを拒み、そのかわりに述べた。「みなさんはきょう、とても立派なパペットをつくりあげました。あなた方はもうパペットマスターなのです」。そう言い残して、彼は大阪の地を去ったのだった。

優れた作家がいて、その作者の手による作品が価値あるものとして展示される。それが通常のアートの在り方だろう。彼が拒否したのは、そうした作家性であり、作品性であったのだと思う。それは、著作権や所有権といった、資本主義を成立せしめる私的所有の論理を拒絶するということでもある。ソルニットにとってパペットとは、不特定多数の人びとの思いが結晶したものであり、あえて作者は誰かと問うならば、それは民衆であるというほかない。ソルニットは、民衆の思いに耳を傾け、吸収し、それをあるかたちに表現＝翻訳するという媒体の役割を担っていたに過ぎないのだ。

だからこそ、ソルニットはファシリテートの作業を大切にしている。ワークショップの前日に、私たちはソルニットを囲んで話し合いの場をもった。まず、ソルニットは「パペットのテーマカラーは何色がいいですか？」と問うた。この問いに対し、私たちは青を選んだ。この企画が「青空大学」という名前であるということが理由のひとつだ。しかしそれだけではない。野宿生活者のテントは、ブルーシートで設えられている。青色は、野宿生活者が自身の存在を表明するために、相応しいものだと思われたのだ。さらにソルニットは、ワークショップ直前に集まりをもち、「あなた方に必要なものは何ですか？」と問いかけた。「酒！」「家！」「水！」などなど、参加者たちは自分たちにとって必要なさまざまなものを声にした。そうしてソルニットは、声に出したイメージをかたちにするためのアドバイスを教授してくれたのだ。このような事前の問答があったからこそ、パペット製作は、自分たちの願いをかたちにする作業にほかならないものとなった。それだけに、つくりあげたパペットたちは、命を吹き込まれいきいきとした表情をみせたのだ。

大阪でのワークショップを終えたソルニットは、その後東京でワークショップを行い、G8 対抗運動の本拠地、北海道へと向かった。私はそこで、ソルニットと再会することが

できた。もちろん彼は、G8 対抗のいわば「本番」である北海道にて、パペットを製作していた。このとき彼がつくったパペットは、各国首脳の顔を据えた骸骨パペットである。サミット最終日の 7 月 9 日、私たちは骸骨パペットを背負い、デモ行進を行った。デモの最終地点は、サミット会場のウィンザーホテルが遠くにみえる洞爺湖の湖畔である。そこでソルニットたちは、各国首脳骸骨パペットを、勢いよくいっせいに地面に叩きつけ、粉々に破壊した。

それは、ひとつの宣言であったのだと思う。この広く豊かな世界を、一握りの「先進国」首脳が我が物として占有する権利などない、という宣言だ。それにしてもたかがパペットの破壊でなにが変わるというのか、そう思う向きもあるかもしれない。だが考えてほしい。「所詮なにも変わらない」という諦めの念は、世界をひどく窮屈なものにさせる。対して世界を変える源泉になるのはいつだって、想像力だ。世界は変えられるはずだという信念と想像力は、たとえ私たちがどんなに抑圧されようとも、誰にも奪うことはできない、絶対不可侵の領域だ。そうした想像力は、いつか、なにかのきっかけで、ほんとうに世界を変えうるかもしれない。骸骨パペットを破壊する風景は、私たちは決して想像力を手放してはいないことをきっぱり宣言するものだった。

もうひとつ、骸骨パペットを破壊する様をみて、はっと気付かされたことがある。それは、パペットとはつくっては壊すのが本筋だということだ。そうすることで、私たちはパペットをつくり、思いを表明するという過程を絶えず繰り返すことができる。そのような過程のなかで、ともに世界を生きる民衆の互いの信頼を、ゆっくりと、確実に培うことができるだろう。

４．青空大学は続く——その後の展開

私たちがソルニットから学んだのは、パペットとは社会的な協働であり、終わることなき過程である、ということだ。2008 年 6 月の素晴らしい経験を、たったいちどきりで終わらせるのはあまりにもったいない。私たちは翌 2009 年 8 月に「パペットマスターぐんぐん計画」と称し、再度パペット・ワークショップを開催した。

このワークショップで私は、ファシリテートを担当した。一年前にソルニットが行ったファシリテートを真似てみた、というわけである。集った参加者を目の前にして、私はソルニットよろしく「あなたにとって必要なもの、ほしいもの、好きなものは何ですか？」と問いかけた。はじめは戸惑っていた参加者も、ぽつりぽつりとことばを発しはじめ、やがて次から次へと投げかけるようになった。発言のたびにそのイメージを白紙に描き記していったのだが、後半はペンが追いつかないほどの勢いであった。

自分自身でファシリテートをやってみて、分かったことがある。普段の生活のなかで、自分にとってほんとうに必要なものはなにかを振り返るという経験は、そうあるわけではない。いざ問われると、しばし考え込んでしまうのは当然だ。しかし、他の誰かが発することばをきっかけとして、その場には連鎖反応が生み出されていく。そうした場に触発さ

れて、参加者ひとりひとりは「自分にとって必要なもの」に目覚め始める。ワークショップ前のファシリテートは、参加者の自分自身への問いかけを促す貴重な時間なのだ。このようなかたちでいったん身体をほぐしておけば、段ボールを切り、組み立て、自分なりのパペットをつくりだす作業は、一段と楽しいものになる。

このワークショップののち、私たちは振り返りの会をもった。その場で参加者のひとりは、次のような感想を口にしていた。「ふだんのデモでは主催者がテーマを設定しているから、それに賛同したり、違和感を覚えたりしながら参加する。でもこの企画は、自分の主張を自分で表現する場だった。やってみてはじめて気づいたのだけれど、ゼロから自分の主張を表現するのは意外と難しい」。この感想を受けて私は、表現する身体性について、あらためて考えさせられた。日常生活を取り巻くメディアは、さまざまなメッセージを私たちに伝達する。現代社会においてそのメッセージは実に多様であり、私たちはときに同調し、ときに反発したりするけれども、一貫してメッセージの受け手としての受動的身体に甘んじている。事前のファシリテートも含めパペットをつくるという経験は、それとは対極にある。自分に問いかけメッセージを生み出し、手先を駆使して段ボールを組み上げかたちをつくり、路上を歩いてパペットに生命を与え、声を発して訴えかける。パペットは、私たちを能動的な身体へと鍛え上げてくれるのだ。

ソルニットの来阪から一年以上の月日を経て、私たちはいまなお、パペットをつくり続けている。そのなかで、私たちなりに学んだことはたくさんある。そしてこれからも、たくさんのことを学び、発見していくだろう。私たちのパペットづくりは、ひょっとしたらソルニットの手法とはかけ離れたものになっていくかもしれない。それでいいのだと思う。おそらくソルニットがみたがっているのは、世界のさまざまな場所で多種多様なパペットが増殖し、自由奔放に権力にモノ申していく、そんな不可思議な風景であろう。2008 年 6 月、大阪城公園の祝祭空間に身を置いた私たちもまた、その風景をみたいと願っている。ささやかな試みではあるが、本書がそのきっかけになれば幸いである。

文献

イルコモンズ「ラディカルパペット」、『VOL lexicon』以文社、2009、182-183 頁。

高祖岩三郎『流体都市を構築せよ！——世界民衆都市ニューヨークの形成』青土社、2007。

ソルニット、レベッカ（井上利男訳）『暗闇のなかの希望——非暴力からはじまる新しい時代』七つ森書館、2005.

村澤真保呂「ネオリベラル・アーツ化する大学教育と「教養」の未来」現代思想 37(5)、2009、158-166 頁。

執筆者一覧

上田 假奈代（うえだ かなよ）

詩人・詩業家。1969 年生まれ。3 歳より詩作、17 歳から朗読をはじめる。03 年「ココルーム」をたちあげ、表現と自律と仕事と社会をテーマにアート NPO を設立。現在は釜ヶ崎でココルームを運営。大阪市立大学都市研究プラザ研究員。ブログ「日々。生きる現代文学」http://booksarch.exblog.jp/

小田 マサノリ／イルコモンズ（おだ まさのり／いるこもんず）

元・現代美術家、アナーキスト人類学、メディア・アクティヴィスト、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所特任研究員、中央大学兼任講師、「〈帝国〉のアートと新しい反資本主義の表現者たち」ほか著述多数、著書なし。ブログ：http://illcomm.exblog.jp/

高祖 岩三郎（Sabu Kohso）

批評家／翻訳家、ニュー ヨーク在住、Autonomedia/VOL 編集委員。主要著書に『ニューヨーク烈伝』（青土社）、『新しいアナキズムの系譜学』（河出書房新社）。

綱島 洋之（つなしま ひろゆき）

京都大学東南アジア研究所。

中倉 智徳（なかくら とものり）

社会学・社会思想史、立命館大学大学院先端総合学術研究科在籍。主要共訳著に『出来事のポリティクス』（マウリツィオ・ラッツァラート著、洛北出版）。主要論文に「発明の力能」（『現代思想』2007 年 7 月号）。

濱西 栄司（はまにし えいじ）

京都大学院生／学振研究員。New Cultural Frontiers 共同編集者。主要著書（共著）：『社会学ベーシックス 第 2 巻』（世界思想社）、『誰も切らない、分けない経済』（同時代社）。

原口 剛（はらぐ たけし）

都市社会地理学、大阪市立大学都市研究プラザ特別研究員／日本学術振興会特別研究員（PD・神戸大学）。論文に「「寄せ場」の生産過程における場所の構築と制度的実践――大阪・「釜ヶ崎」を事例として」『人文地理』55-2 など。

吉澤 弥生（よしざわ やよい）

大阪大学グローバル COE 特任研究員／NPO 法人地域文化に関する情報とプロジェクト[recip]代表理事。主な論文に、2007「文化政策と公共性――大阪市とアート NPO の協働の事例から」『社会学評論』58（2）、2009「新世界『ブレーカープロジェクト』の軌跡――三度の『野点』を中心に」『アートマネジメント研究』10（美術出版社）。

558－8585 大阪市住吉区杉本3－3－138
3ー3ー138 Sugimoto Sumiyoshi Osaka 558ー8585 JAPAN
http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp